

---

# 死者の手。

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死者の手。

### 【NZコード】

N8091K

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

前原武は佐山零の恋人である。その二人を乗せた車が事故に遭い、前原武は帰らぬ人となつた。しかし、佐山零の前に彼は毎日のように現れる。

(前書き)

最初から破綻した話だったんですが、一応改稿してみました。  
あまりに酷かつたので。

前方不注意で田の前に対向車が見えた時には遅かった。

慌てて避けようと、ハンドルを切った先には電柱があり、車はそれに衝突して大破した。

運転手の前原武は即死した。

後部座席にいた私、佐山零はシートベルトをしていたのもあって即死を免れ、救急隊によつて車内から助けられ一命を取り留めた。

事故後、私は軽症だつたらしく、その日の夜、家に帰つて来たい。

全くその時の記憶はないんだけど。

武は……死んでしまつたのに、私だけ生き残つてしまつた。でもなぜか、涙が出てこない。ショック症状つてやつだらうか。漠然と胸の内に彼の死の事実はあるんだけれど感情が凝つて何も考えられない。

「じゃあ、零行つて来るわね」

「うん……」

私は居間にあるテレビに視線をおいたまま、母に右手をひらひらと振つてみせる。

溜息のような声が、後方からもれた後、扉が閉まる音がした。はあ、何をしようかな……

今日はなんだか、頭がぼーっとしている。

昨日あんなことがあつての次の日だし、後遺症かな。

それに、時折、なんだかとてつもない眠気の波が寄せては返しで意識が朦朧としてくる。

ああ、眠い……

「おー、起きるよ……」

「え？ 武……」

私が腰を沈めたソファーの隣には死んだはずの武がいる。うーん、これはたぶん、いつの間にか寝ていて夢を見ているに違いない。

武は夢の中で猿のように長い手を回して私の肩をそつと抱く。無地の白いTシャツにジーパンといつラフな格好をしている。

「元気だせよ」

「そんな事言われても……」

屈託ない笑顔はどこか悲しげに私に向かっている。

私は彼の顔をまともに凝視することができない。

「武ちゃん、きてたの？」

そんな時丁度、母が帰つて來た。

あれ、一人水入らずの夢の中になんて無料な母親

などと思い、

「私の夢の中から出て行つてよ～母さん」

母に憤然と抗議する。

「何言つてんのよ、寝ぼけるんじゃないの」

母が怪訝そうに顔をしかめて、腕時計をした手を差し出す。ちょうど時計の針は12時を挿していた。

「もう昼間よ、寝ぼけてるの？」

母はやけに耳に残る声で私に言つた。

おかしい、夢にしては妙にリアリティあると云つた。

田に映る居間の風景は鮮やかで、母の声も妙にはつきりと耳の奥まで響く。

まさか、起きてる？ 私。

でも、それなら隣にいる武は一体！？

「武ちゃん、幽霊になつて靈のこと心配で来ててくれたのよ

「え！？」

私は一瞬言葉を失い、隣にいる武の顔を眺め見た。

「そういうこと…」

「えええ… もうこいつこと…」

武は明るく笑うと、母も一緒に口を押さえて微笑む。

「やうか、武死んですぐ、私のところへ来ててくれたんだ」

「お前が寂しがってると思つてなー。」

田の前にいる武は夢の產物ではなく、本当に私の横に存在していた。

死んで幽靈となつてすぐに、私のところへ駆けつけてくれた。  
とはいへ、当たり前のよう言つてはいるけれど、普通はないことだ。

私の家が特殊な家系、つまり私や母が靈媒体質であつて初めて実現する。

しかし、まるで生きてるような量感……

張りのある肌、笑うと口の端にできるかわいいえくぼ。

武は生前と変わらず潰刺した様子で私たちの目に映つている。

「武、ごめんね、私だけ生き残つて」

「俺こそごめん……巻き込んでしまって」

私の凍結していた感情が溶け出して、色々な思いが収斂せずばらばらに浮んでくる。

なんて切り出したらいいんだろう。

分かんないよ……

私は堪えきれなくなり俯くと、長い髪が周りの視界を完全に遮る。言葉より先に涙が溢れ、抑え切れない気持ちを代弁し始める。

「なんで……」

そう言つたきり、声を上げて一人の前でしゃくりあげた。

体を曲げて武の膝枕に頭を置き、猫のように丸くなつて横たわる。幽靈である武の肉感やぬくもりが私の頭に伝わるわけはない。けど、なぜか、彼の幽体に接する頬に暖かみを感じていた。

武の優しさを湛えた瞳が上から包み込むように私を見下ろしてい  
るせいだろうか。

暖かい……このままずっと……

黙つたまま武はずっと私を眺めていた。

しばらくして、私の意識は春の日向でひひひひひひひひとする猫のように眠りに落ちていった。

「行つてきます、武ちゃんよろしくね」

「はい、こつてらつしゃい」

私の意識は大分、覚醒に近い状態にあった。夢現にしつかりと母と武のやり取りを聞いている。たぶん、母は武の通夜にでも行くんだろう。まどろみの中で漠然とそう思った。

「俺よ、後3日したら、あっちにいくからよ」

私は目が覚めてからしばらくして、武は唐突に私にそう告げた。戸惑いは隠せない。

3日なんて早急すぎる。

とはいえる、武はもうこの世の人間じゃないんだ。どうちみちいつかは、あの世に行かないといけないんだろう。「あの世って存在するんだ？」

「もちろん……」

行つたことないくせに、武はやけに自信満々で頷く。なんで分かるんだるつ……

「そういえば オカルト本で読んだことがある。

死んで幽霊となつて、初めて様々な世界の成り立ちや宇宙の真理を理解することができると。

「なんでも3日後？」

「そう……決まってるのさ」

武が神妙な顔つきで言つと、窓の外に広がる遠くの空を眺めていた。

彼の視線の向こうには何が見えてるんだろう。

生きている人間には決して目にできない世界の存在を、武は知つ

てしまつたんだ。

今隣にいる武はもう私の知つてゐる武じゃないのかもしねりない。

それからまた、私は猛烈な眠気に襲われた。

瞼が自然と重く垂れてくる。眠るまいと持ち上げる。

しばらくそれを繰り返した。

武の顔が薄つすら白い視界に浮んでゐる。

「零、またいくのか」

「行くつて……」

寝入る前に最後に聞いた武の言葉、その意味は分からなかつた。それを最後に意識はまどろみの中へ引き込まれてしまつ。

漆黒の闇の深淵で私は、遠い場所から聞こえる喧騒のよつたものを耳にした。

男の人の声……女性の声も聞こえる。

言葉は聞き取れないけど、なんだか騒がしい。

微かな音ではあるが、妙に現実感が伴い耳に残る音だ。

闇に覆われた空間に漂いながら、その遠くの音に耳を欹ててゐる。

しばらく かどうかは分からぬ。

夢の中の時間なんて曖昧だ。

だけど、次に聞こえた声に私は一瞬心が動いた。

「零！ 田を覚ましなさい！ 零！」  
「え、お母さん……？」

「ふー、変な夢見ちゃつたよ

いつもと変わらない朝の光がカーテンを透かして居間に淡く満ちている。

テーブルの前のソファーに母が座つてゐる。

その隣には武もいる。

「やつと起きたか？」

「どうしたのみんな、今日はやいわね」

私が欠伸をしながら言つと、武はいつもと変わらない笑顔を私に振り撒く。

しかし、隣にいる母の様子が可笑しい。

顔を伏せたまま、一言も発しない。

「お母さん、どうしたの？」

私は心配になり母に尋ねた。

「あ、起きてきたんだ、おはよ……」

どうやら、やつと私の存在に気づいたようだ。  
母の頬ははれぼつたく赤く充血していた。  
ずっと泣いていたんだろうか。  
なにがあつたんだろ……

「お母さん何があつたの？」

不安になつて聞いてみる。

母は視線を下げたまま答えよつとしない。

「雲……俺今日あの世に出発することになつたよ」

母が答えずにはいると、唐突に武が言つた。

「え？ 今日？ なんで？ 急になんで？」

「お前に言つただろ、3日後あつちへいくつて」

「えええ！？」

あれから三日も寝ていたんだ。

私の時間の感覚は酷く曖昧だった。

眠りについたのが、ついさっきのよつに感じていた。

そのため、武の言葉があまりに早急に感じて心で消化できない。

「雲、お前に今まで話していなかつたが……」

と、武は前置きするよつに言つと、下を向いたまま困つたよつに口を閉ざす。

しかし、少しして、何か決心したかのように顔をあげると静かに

話し始める。

「お前は実はずっと病院にいたんだ。けど、今日の朝病院のベッドで亡くなつた」

「え、どうこいつこと？」

意味が分からない。

「ずっとお前の事待つていたんだ……」

「…………」

何を言つてゐるのか理解できなかつた。

病院？ 私を待つ？

武の舌足らずな説明は、言い知れぬ不安だけを私に生起させた。そうしていふうちに、母が低い声で泣きはじめる。

ど、どうこいつこと！？

1時間くらい一人から話を聞いてゐるついで、やつと事の次第が飲み込めてきた。

私は病院に担ぎ込まれてからずっと、病院のベッドで生死の境を彷徨つていたんだ……

母の話から、ずっと意識なく病院の集中治療室で横になつていたらしい。

その間、私は生靈として元の体から分離して、自宅に帰つてきていた。そんな私を放つておけなくて、武はあの世へ行く日を延ばしてまで私を待つていた。

果たして、今日の朝、私の命は死き息をするのをやめた。

生き靈である私は、今は武と同じ……

全てを理解した私は、泣き止まぬ母を見て、

「お母さん……」やめんね、私、本当親不孝者だ

「…………」

私は母の頭にそつと手を添えた。だけど、その手には母の髪の感触は伝わってこない。

けど、母は涙を流しながら、小さな花をそつと包むように私の手を両手で覆った。

感覚はないけど、母の私を慈しむ気持ちが私の魂に直接伝わってくる。

「雪、行こうか……」

「うん、行こうー。」

そして、後ろ髪を引かれる思いで母から手を離すと、武が指差す方向に瞬く白光を目を細めて眺める。

差し出された優しく暖かい武の手を握って、私たちは母に一度手を振ると歩き始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8091k/>

---

死者の手。

2010年10月8日15時22分発行